

悪霊 第四部・荒れ野の花

悪
霊

第
四
部
・
荒
れ
野
の
花

【登場人物】

- 伊集院満枝…………… 日市の地主の娘
猪俣佐和子…………… 満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。黨員となる
増田小百合…………… 旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
佳代…………… 貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
喜代美…………… 女工。党に派遣されモスクワに留学
李麗姫…………… 女性抗日バルチザン
小沼健吾…………… 労働運動家。伊集院家の元小作人
三沢…………… 党中央委員
村野栄太郎…………… 黨員。マルクス主義研究者
大橋多喜蔵…………… 黨員。プロレタリア作家
増田喬…………… 小百合の夫
磯田アヤノ…………… 小百合の叔母
磯田幸吉…………… アヤノの夫。学校教師
悦子…………… アヤノの生徒。東京に家出する
加藤寅二郎…………… 磯田幸吉の元教え子。脚本家
石原中佐…………… 関東軍参謀

昭和六年（一九三二）年一月～十一月。モスクワ、間島、東京市、満州大連、弘前市

II

同じ頃、東京・目黒めぐろにある競馬場近く、ささやかな商店街で買い物をする佳代かよの姿があった。今夜は客が来る、鍋の用意をしろ、と言いつかっていた。八百屋で長ネギと大根を仕入れ、お金を払って店を出る。後は、鶏肉。「かしわ」と墨書された行きつけの店へと向かう。安い胸肉を四枚。それからお酒。

小沼さんは、お酒はまったくお呑みにならなかったな……。酒屋の亭主ますが枡ますではかる焼酎を、持参した一升瓶に注いでもらいながら、佳代はふと、そんなことを思い出した。

昨年の五月一日のメーデーの日、出かけていた小沼健吾こぬまけんごが淡路町の平屋に帰ってくるなり、「すぐ引越すぞ」と告げた。言われるまま、身の回りの品だけ持って目黒にある二階建ての小さな家に移ると、小沼は姿を消した。その後しばらく、訪れる者もいまま、佳代は小沼から預かっていた生活費をもとに、独りで過ごしていた。

「党」から派遣された男が佳代の前に現れたのは、六月に入ってからだった。

同志が一人、明日からこの家で住む。面倒を見てやってくれ。

佳代は素直にうなずいた。今、彼女が生きていられるのは、「党」の命令に従い、いわゆる「ハウスキーパー」役をこなしているからだということは、十分に承知していた。そもそも、人の言いつけにそむいたことのない娘である。

翌日の夕方、手提げかばん一つで現れたのは、ロイド眼鏡をかけた、三十歳を二つ三つ超えたふうの痩せた男だった。

大橋多喜蔵。

男はそう名乗り、「飯にしてくれ」と、二階の四畳半の部屋に入った。

大橋は、一度出かけると半月や一月不在になることも珍しくなかった小沼と違い、一日に一度の街頭連絡以外は、部屋にこもっていた。茶を淹れて運んでいくと、ちゃぶ台に原稿用紙を広げて何か書いている。時々、文具屋で原稿用紙を買ってくるようにと佳代に命じた。

大橋が、いわゆるプロレタリア作家であることを、佳代は知らないし、知ろうともしなかった。ただ、食事や洗濯などの世話をしると命じられたから黙って一生懸命やる。それ以上のことを考えようとはしなかった。

……知ろうとしてはいけない。

……深く人と関わって、いいことは何一つない。

それが、佳代が十七年生きてきて得た、人生訓のようなものだった。

ある日、夕食を部屋に運び、ちゃぶ台の上に茶碗を並べていると、窓から夕焼けを眺めていた大橋がぼつりと訊ねた。

「君は、いくつかね」

十七です。そう答えると、若いな、とつぶやき、こう付け加えた。

「ユキが死んだのも、十七だったな……」

ユキは女性の名前らしいことは分かったが、それが大橋にとってどんな存在なのか、佳代は訊

ねるようなことはしなかったし、大橋もまた、それ以上は言わなかった。

次にその名を大橋の口から聞いたのは、蒸し暑い夏の日だった。その日、佳代は小さな裏庭に面した縁側に金盥置き、水を張って肌を拭っていた。大橋は街頭連絡に出かけていて不在だった。裏庭は丈の高い塀に覆われ、覗かれる心配はない。

上半身はだけ、汗ばんだ肌に、冷たい水に浸した手ぬぐいを当てる。ひんやりと心地よく、佳代は眼をつむって涼を楽しんでいた。

背後に人影を感じたのは、上半身を着物で覆い、裾をまくって両脚をただけさせ、金盥の水に脚を浸していた時である。街頭連絡から帰った大橋が立ちつくしていた。

「あ……」

佳代は慌てて盥から足を引き抜き、裾の乱れを直して俯いた。

「すみません……」

顔をあからめて謝る佳代を、大橋は無言で抱き寄せ、畳の上に押し倒した。

佳代は、生娘ではなかった。大橋は、そのことに特に何かを感じたわけでもなさそうだった。淡々と情事は終わり、大橋は二階の自室へと消え、佳代は再び縁側に出てからだを拭き、夕食の支度のために台所へ向かった。

以後、大橋は数日に一度、佳代のからだを求めた。佳代はおとなしく従った。情事の間、佳代はあまり表情を動かさず、天井を見つめていた。からだの内部で、他人のからだの一部が蠢いているという違和感以上のものを、佳代は覚えなかったし、情事とはそういうものだと割り切っていた。

秋が訪れたある日の夕方、いつものように短い情事を終え（大橋は、果てるのが常に早かった）、身繕いをしている佳代の傍らで、大橋が呟くように言った。

「君は、気持ちよくなるのか？」

え……？

佳代は振り向いて大橋を見た。大橋は俯き、眼差しを逸らしている。どう答えてよいか分からず、佳代は再び大橋に背を向けた。向けたとたん、大橋の口が開いた。

「僕は……下手なのか？」

再び振り向くと、大橋は佳代に背を向けて立ち上がっていた。

「ユキは……そんなではなかった」

そのまま二階へと消えた。

そんなではなかった、とは、情事の時の自分の振るまい方だということは、佳代にもおぼろげながら理解できた。いつものように大橋の部屋に夕食を運び、自分は台所で食事を済ませ、洗い物を終えて布団に入った佳代は、初めて、男のからだを受け入れた時のことを思い出していた。

十五の時だった。その二年前に夫を亡くした佳代の母は、女手ひとつで田を耕し、佳代や幼い弟を育てていた。ある日、見知らぬ男が、佳代の家に住み着いた。年の頃は三十過ぎだろうか。人当たりのよい働き者で、佳代や弟もかわいがってくれたその男は、半年を過ぎるころから豹変した。毎晩大酒を呑み、佳代の母に暴力を振るうようになった。仕事もせず遊び暮らすようになった男に、佳代の母は懸命に尽くした。

ある日、佳代の母が病に伏せていた夜、男は佳代の寝床に忍び込んできた。ひどく痛かったが、隣で寝ている弟を起こしたくない一心で声をたてなかった。

以来、男は幾度か佳代を抱いた。佳代が女衞セブツに売られたのは、男との間柄を知った母が、怒り狂って実の娘を追い出したのだった。

そういえば……。

佳代は思った。

小沼健吾は、一度も自分のからだを求めなかった。

だからどうと言うのではない。ただ、小沼さん、今頃どうしているのだろう……。女のひとと同居しているのだろうか。小沼さんは、その女のひとを抱くだろうか？

そう考えて、佳代は狼狽した。

ひとのことに、関心を持つては行けない。

何も考えず、ただ、受け入れる。

そうすれば、飯を食って生きていくことはできるのだから……。

話を、昭和六年一月のある日に戻す。すなわち、佳代が大橋多喜蔵と同居しはじめてから、半年が過ぎていた。

この家に、客が来るのは初めてだった。小沼と暮らしていた淡路町の家には、来客は頻繁にあったし、女工たちの勉強会で賑やかになることもしばしばだったのだが。

その前日から、大橋の様子は常と異なっていた。減多に笑顔を見せない男が、ひどく嬉しげだった。やはり、お客さんが来るとなると、こんな人でも喜ぶものなのだろうか……。佳代はそう

思ったが、それだけではなかった。

前年のメーデーでの武装蜂起が不発に終わった直後、「党」の幹部は根こそぎ検挙された。しかしながら、「党員」がいるかぎり、「党」は滅びない。すなわち、幹部が検挙されれば、また新たに幹部をたてて、組織を作り直せばいい。「党」再建の中心となったのは、前年十一月にモスクワから帰国した、極東労働者共産大学（クートヴェ）の留学生たちである。

そして、「党」は久しぶりに中央委員会を開くこととなった。その会合の場所選ばれたのが、佳代が大橋と住む、目黒のアジトだったのである。

買い物を終えて帰ってくると、大橋は留守だった。いつも夕方は街頭連絡で外出するのが決まりである。台所で鶏肉や野菜を切り分け、七輪に炭をくべて二階の大橋の部屋に運んだ。夕日が射し込む六畳の部屋に七輪を据え、火を熾してだし汁を張った鍋を置いた。

佳代は、しばしばんやりと、あかい夕日を浴びながら、鍋のだし汁が次第に泡をたてはじめるのを見つめていた。

大橋が、四人の客を連れて戻ってきた時、ちょうど、鍋のだし汁はいい具合に沸騰していた。

「やあ、ご苦労さん」

玄関に降りていくと、どこかしら暗い面差しかたつの客たちのなかで、一人、鬚かげりが微塵みじんもうかがえない風貌の小男が、闊達かたつな声で佳代に手をあげた。

「いらっしやいませ」

きちんと座って両手をつく。小男は頷き、なかなか、羨しつげのいい娘さんじゃないか、今時、珍しいね、と大橋に言った。

「君のお仕込みかね？」

「三沢くん」

学者のような風貌の客が、小男をたしなめた。三沢と呼ばれた小男は、失敬、失敬と頭をかき、靴を脱いであがった。

「何かおかしな物音があったら、すぐに知らせてくれよ」

大橋はそう佳代に耳打ちし、四人の客とともに二階へと消えた。佳代は台所脇にある四畳半の自室に戻り、ちゃぶ台に座って読みさしの本を開いた。レーニンの『帝国主義論』である。

尋常小学校しか出ていない佳代には、難しすぎる漢字が並んでいる。読めない部分は、いちいち辞書を取り出して引き、傍らに鉛筆で意味を添える。読み方や意味がわかってても、そこに書かれていることの内容が理解できるわけではない。ただ、難しい漢字が次第に読めるようになっていくことが、闇が払われ明るい光に照らされたような喜びを与えてくれる。小沼の家に同居するようになってから身に付いた習慣は、今も続いていた。

「お帰りだぞ」

二階から声が降ってきた。はい、と答えて佳代は本を伏せて立ち上がり、玄関へ向かった。客たちがどやどやと階段を下りてくる。

「ほう」

何気なく佳代の部屋に眼をやった三沢と呼ばれる小男が言った。

「君は、同志レーニンの著書なんか読むのかね？」

佳代は眼を伏せ、答えなかった。

「感心なことだ。いや、おいしい鶏鍋を御馳走になった。ありがとうさん」
軽く肩を叩いて、三沢は玄関に座り、靴をはきはじめた。他の三人は相変わらず無言で、佳代と眼を合わせようともしない。

客が去った後、佳代は二階へ上がり、鍋や食器を片づけはじめた。部屋の際に、見慣れぬ手提げ鞆くらいの大きさの木箱が置いてあった。客が持ち込んだものらしい。さして詮索もせず、佳代は七輪も含めて食器一切を台所に運び、再び二階にあがってふきんでちゃぶ台を拭いていると、背後に立った大橋が、そっと佳代に抱きついた。

佳代は抗わず、大橋のなすがままに仰向けに横たわった。

「今日ほど嬉しい日はない……」

佳代の胸に顔を埋めながら、大橋は呻いた。

「党の新たな出発だ……歴史的な一日……我が家その舞台になったんだ……」

大橋の呻きを理解しないまま、佳代は、彼の頭を抱えて撫でさすった。そのまま数分が過ぎ、不意に大橋はからだを起こした。

「ぼくが、左翼運動に身を捧げようと決意したのは、二十歳の時だ」

滔々と語り出した大橋を、佳代は身を起こし、正座して見つめた。

「北国の商業専門学校に通っていた頃だ。当時のぼくは随分と荒れた生活をしていた。酒浸りで、女郎屋にも頻繁に出入りしていた。そんな時、女郎屋で出会ったのが、ユキなんだ。ちょうど、今の君と同一齢だった」

大橋は、佳代を一瞥し、俯いて語り続けた。

「貧しい農家に生まれ、親を借金苦から救うため、苦界に身を投じたのだそうだ。僕は、親にねだって金を出してもらい、ユキを身請けした。ぼくの下宿に住ませ、半年、ともに生活した。だが、結局、ユキは去っていった。後で聞いた話では、彼女は肺を患っていて、ぼくに伝染すのを恐れたらしい。ほどなく彼女は死んだ……」

大橋は、ロイド眼鏡を外し、涙で曇ったレンズをハンカチで拭いた。

「この家に来て、君を見た時、ぼくは死んだユキと再会したような錯覚にとらわれた。そして、壊滅状態だった党が再建され、記念すべき中央委員会が、ここで開かれた。ぼくには、君がそういう巡り合わせを運んでくれたような気がするんだ」

佳代は、瞬きもせず、大橋を見つめた。大橋は、流れ出る涙をしきりと袖で拭っていたが、不意に思い出したように顔をあげ、眼鏡をかけて問うた。

「君は……まだ黨員ではなかったね」

頷く佳代に、大橋は続けた。

「そうか……三沢さんが、君に黨員資格を与えるようにと言っていた。今、獄外にいる黨員は全国合わせて百人にも満たない。君はハウスキーパーとして長年、立派に党のために尽くしてくれた。今後は、同じ黨員として、われわれとともにたたかってほしい」

黨員……。

佳代は、よく意味が呑み込めないまま、頷いた。わが身の運命を、自分自身で決めるのではなく、他人に委ねることに、佳代は慣れきっていた。頷く佳代に、大橋は相手を崩し、じゃあ、最初の仕事だ、と部屋の隅に置かれた木箱を引き寄せた。箱を開けると、鉄の棒のついた黒くて大

きな硯すずりのような板があり、そばに鉄製の尖った鉛筆のような棒が置いてある。

「ガリ版だ」

と大橋は説明した。今後、ぼくは党のアジ・プロ部門の人間として、宣伝ビラの文章を書く。君は、ガリ版刷りのやり方を覚えて、ビラを作ってほしい……。

興奮してまくしたてる大橋を、佳代はかすかな笑顔で見つめていた。

一ヶ月がすぎたある夜、再び「中央委員会」が、佳代と大橋の住む「アジト」で開かれた。

客は以前と同じ四人だった。他の男たちが押し黙っているなか、快活な小男の三沢だけは、出迎えた佳代に「よう」と手を挙げ、「ガリ版は切れるようになったかね？」と訊ねた。はい、と頷くと、「それは感心だ」と言い、二階へと消えた。

会合は三時間ほどで終わった。二階から降りてきた三沢は、「じゃあ、これをよろしく」と原稿用紙を佳代に手渡した。黨員に配る機関紙の原稿である。原稿用紙の裏には、見出しの位置などが細かく指定してあった。

「これをひとつ、四百部刷ってもらいたい」

それから、ガリ版を切る時は、部屋の窓に毛布か布団を張って音が漏れないようにすること、刷る時に指紋が写るといけないから必ず指サックをはめること、いいね。

細かな指示を与えて三沢は他の男たちとともに去り、佳代は、言われたとおり、毛布を取り出して窓を覆い、謄写版の木箱を開け、ガリ版を切り始めた。大橋がその傍らに座り、重々しく口を開いた。

「今後、機関紙の印刷はうちでやることになった。中央委員会で決まった方針を、すべての黨員に知らせる大事な新聞だ。間違いのないようにね」

それから、三沢さんは、君のことをとても誉めていたよ。と付け加えた。

「え？」

佳代は訝いぶかしげに大橋を見た。誉められるようなことは何もしていないが……。

「いや、君のような娘は、いちばん信頼できる同志なんだぞうだ。今までの党は、インテリ中心で、労農階級とのつながりが希薄だったことに問題があった。大衆をなるとけ多く動員できなければ、目的の達成なぞありえない。今後は、党を大衆化し、広範な労働者を組織する。そのためには、君のような労農出身の黨員の声を、もっと取り入れていくべきだろう。三沢さんはそうおっしゃるんだよ」

佳代はしばらく小首を傾げていたが、大橋の言葉をよく呑み込めぬまま、静かに微笑んで、ガリ版に向かった。

その頃……。

大橋の「アジト」を出た三沢は、他の中央委員たちと別れると、駅前でタクシーを拾い、運転手に「品川駅」と告げた。駅前で降りると、公衆電話のボックスに向かう。受話器を取り上げると交換手が出た。三沢は、電話をかける相手の住所と、「森本さん」とその名を告げた。

やがて相手が出た。三沢は喋りだした。

三沢です……。ええ、決まりました。中央委員長は徳田こと風祭、アジプロ担当の委員は飛田こと岩橋、青年同盟担当は浜松こと紺藤。私は、党組織の一切を担当します。……。ええ、一切を、

です。では。

「さて……」

三沢は受話器を置いて、つぶやいた。

「次は、鶴沼だな」

III

三月が近づいていたが、まだまだ、朝は寒い。

散らかった四畳半の、真ん中に敷かれた布団がむくりと隆起し、その端から寝乱れた頭がのぞいた。

「朝か……」

猪俣佐和子は、眠たげな眼をこすり、漂ってくる籠^すえた匂いに顔をしかめた。

かたわらに一升瓶と湯飲みが転がっていた。昨夜、布団に入ったまま寝酒をしているうちに眠りに落ちた。転がった湯飲みからこぼれた酒が、畳にしみこんだまま発酵し、不快で甘酸っぱい匂いを発している。

布団をかぶったまま部屋の隅に移動し、乱雑に畳まれた衣類の山から丹前を引っ張り出した。布団のなかで丹前をまとい、やっと立ち上がって、乱れた胸元を直した。

時計を見ると午前九時だった。

鶴沼駅前のアパートで暮らし始めてから、すでに一年近くになる。その間、佐和子はほぼ毎日、

党員でありマルクス主義研究者の村野栄太郎の家に通っていた。村野の推挙で、党の東京支部長補佐の役職に就いたが、昨年五月のメーデーでの武装蜂起の中止の責任を負われ、解任された。今は、ひたすら村野の執筆の手伝いをする毎日である。

執筆の手伝いだけならまだ我慢できる。一仕事終えた後、必ず村野の股間を蹴ったり、叩いたりしなくてはならない。睾丸を痛めつけられないと勃起しない村野は、佐和子にその箇所を蹴られてのたうちまわりながら、自慰に耽^ふけるのだ。

……ただのハウスキーパーじゃ嫌だから、あんな酔っ払い学者の相手をしてあげたのに、今じゃハウスキーパー以下だわ。

メーデー以来、小沼健吾とは顔を合わせていない。貴代美がモスクワに留学した事も知らない。知りたくもないわ、あんな人たち……。

人恋しくなる夜などに、貴代美の肌の暖かさが蘇ってくることもある。だが、甘い陶酔が過ぎると、あの日、自分ではなく小沼に従った貴代美の姿が思い浮かび、とたんに心臓を鷲掴みにされたような息苦しさ襲われるのだ。

その息苦しさを追い払うため、佐和子は酒に溺れた。村野から十分すぎるほどの生活費をもらっていたから、酒代には困らない。部屋の隅には、三本ほど、空の一升瓶が転がっている。

村野の家には昼過ぎに行けばよい。やることと言えば原稿を清書するくらい。たまに東京に出て洋書を買入れたり、図書館で文献を筆写することはあるが、党の活動に関係すること以外の行動は禁じられている。

昼までどうやって過ごそう……。

たまった汚れ物を洗濯する。部屋を掃除する。どれも億劫だった。思い切り買ひ物をしてみよかな。甘味屋でお汁粉を三杯食べようかしら。それともシネマ？

どれも女独りでは憚られる行為だった。目立つことは慎むように、と厳しく言われてもいる。結局、佐和子は昼まで、ここ数日敷きっぱなしの布団のなかでほんやりして過ごした。

昼過ぎ。

村野栄太郎が間借りしている海岸そばの農家の離れに行くと、先客が着ていた。閉じられた障子の向こうから、ぼそぼそとした村野の声に混じって、よく通る快活な声が漏れてくる。聞きなれぬ声だった。佐和子は、失礼します、と声をかけた。

「やあ、入りたまえ」

村野の声に障子を開けると、布団の上に胡坐をかいた村野と向かい合って、精悍そうな面立ちの小男が座っている。

「井上くんだ」

村野は、佐和子を指してそう紹介した。小男は、ああ、あなたが井上さんか、と大きく頷き、「三沢です」

と名乗った。なぜ自分のことを知っているのだろうと訝しく思いながら、座ってお辞儀をする、村野が耳打ちした。

「三沢くんは、この度、党の中央委員になった人だ」

佐和子は眼を見開いた。中央委員は「党」の最高幹部であり、すべての指令は中央委員会からその名も顔も知らぬ雲の上の人である。佐和子の知る「黨員」に共通する、後ろ暗い翳りのようなものが一切うかがえないことも、奇異に感じられた。

三沢は、佐和子に向かっていった。

「今後、再建に向けて、村野先生にもおおいに働いてもらわなくちゃならない。井上さん、よろしく頼みますよ」

「はぐ」

笑顔で答えたつもりが、歯切れの悪い口調になった。三沢は一瞬、怪訝な表情を浮かべたが、すぐに明るさを取り戻し、村野に向かって言った。

「目標は黨員一万人獲得ですからね。そのためには、村野先生の健筆で、大衆を啓蒙していただくねばなりません」

「一万人とは大きく出たね」

苦笑いする村野に、三沢は真顔になった。

「いえいえ、これは夢でもありません。むしろ、日本のプロレタリア階級五百万という数字に比すれば、少なすぎる数字です。大衆の支持基盤を確たるものとすることなくして、我らの勝利はありません……いや、これはとんだ、釈迦に説法でしたな」

愛嬌のある笑顔で頭をかく三沢に、村野は「唯物論者がお釈迦様はないだろう」と返し、しばらく雑談を続けた後、このへんで、と三沢は立ち上がった。

「お帰りかね」

「ええ、他にも寄るところがありますので」

「そうか、じゃあ井上くん」

村野は佐和子を一瞥した。

「そこまで送って行って差し上げなさい」

いえ結構です、と辞退する三沢に、まあいいじゃないか、と村野は押し切り、結局、佐和子は駅の近くまで見送ることとなった。

「おっと、これを忘れちゃいけない」

三沢は懐から薄い茶封筒を取り出し、正座して村野に差し出した。村野は受け取り、封筒をあけて便箋を一瞥し、わかった、と頷いた。

その茶封筒の中身が何か、佐和子は知っている。

これまでも幾度か、「党」の連絡員がこの家を訪れ、茶封筒を置いていった。中身は、中央委員が決定した「党」の方針の箇条書きである。

その方針をもとに、村野は雑誌に寄稿する原稿を書く。方針が変われば、原稿の中身もまた、変更される。それに気づいた時の佐和子の失望は大きかった。

むろん、「黨員」である以上、私情を殺して「党」のために尽くすのは当然かもしれない。だが、わずかに残っていた村野への尊敬の念が消えてしまったのも事実である。学者としては「党」の操り人形であり、男子としては佐和子の膝にすがって急所を蹴ってくれと懇願する情けない姿

態でしかなくなっていた。

三沢と連れ立って、農家を出た。幹線道路に出るまで、しばらく海岸の防砂林ぞいの小道を歩くことになる。

三沢は人をそらさない話術の持ち主だった。話題は、現内閣が二月初めに衆議院に提出した婦人公民法案だった。

その前年には、二十五歳以上の男女に等しく選挙権を与える法案が提出され、衆議院では可決されたが、保守的な貴族院で廃案となっていた。今回の法案は、女子の参政権を市町村議会に制限したものである。

「あなたはどう思います？」

三沢は訊ねた。

「どうと申しますと？」

「女性運動家たちの多くは、昨年の法案からだいぶ後退したとして、反対しています。この件に關するわれわれの方針ははまだ固まっています。今、いい機会だから女性の意見をうかがって参考にしようかと思っただけです」

「そんな……わたくしの意見など……」

「私は」

三沢は足を止めた。笑顔が真顔になっていた。真顔になると、眼光が妙に鋭くなることに、佐和子は気づいた。

「さきほど村野先生に申し上げた黨員一万人獲得……本気でやるつもりです」

静かだが重い語調に、佐和子も頷かざるを得なかった。三沢はさらに声を低めた。

「今まで我が党は、一部幹部の独断によって運営されてきました。その弊害が、今のていらくを招いたのです。私は、そういう弊害を取り除いてしまいたい。一般黨員、特にあなたがた女性黨員の意見をどんどん吸い上げ、党運営に反映させていきたいのです」

「わたくしは……」

射抜くような三沢の眼差しから顔を背け、佐和子は言葉を選んで搾り出した。

「ブルジョア政党の婦人参政権運動など……興味はございません」

「むろん、私も興味はない」

三沢は言った。

「彼らは単に、選挙の票がほしだけです。議会で抛る彼らは、票田を広げる以外に党勢を伸ばす方策はない。真の女性解放のためなんかじゃないことは明らかだ。ただ問題は、われわれが率先して日本女性に訴えるべき女性解放の理念を、偽りのかたちであれ、ブルジョア政党に先を越されて公表されたという事実です」

この問題を直視しないかぎり、我らの勝利はありえない……。抑えた調子ながら、言葉のひとつひとつが胸に響いてきた。

そうだった……。

佐和子の脳裏に、屈辱的な昨年のもーデーでの一件が蘇った。

今でも佐和子は、小沼の判断が正しく、自分が間違っていたとは認めていない。だが、貴代美を含む女工たちの心を掴む上で、小沼のほうの説得力を持っていたことは認めなければならない。

現実を直視し、彼らプロレタリア階級の人々の心をよく知り、その上で、たたくいに参加したい。観念的な学者の原稿執筆の手伝いに若い命を無駄に費やしたくない。

いつしか、佐和子の眼が熱く潤み、涙がこぼれ出た。

どうしたんです？ 三沢がうるたえて訊ねた。佐和子はひとしきり涙を流したあと、ハンカチでぬぐって顔をあげた。

「わたくし……今の自分がいやなのです」

「いや？」

「こんな……、たたくいから離れた場所で、安穩おののんと時を過ごしている自分がいやで……」

「どういうことですか？」

「わたくしに……」

佐和子は、三沢をまっすぐに見据えて言った。

「別のお仕事を……もっと危険で、もっとプロレタリア階級のお役に立てる、そういうお仕事を与えていただきたいのです」

その日の夕刻。

鶴沼から駅を二つ挟んだ藤沢駅前の喫茶店で、三沢はゆっくりとコーヒーを啜すっていた。

店のドアが開き、男が入ってきた。二十代半ばで、烏打帽を目深まぶかにかぶった、見るからに卑しげな面相である。

男は、まっすぐに三沢のテーブルへと歩き、向かい合って座った。

「どうだった」

コーヒーのカップを置き、煙草に火をつけながら三沢は問うた。

「ええ……へへへ」

男は眼を細めて思い出し笑いを浮かべながら言った。

「いや、実に驚きましたぜ」

「何をだ」

「あの男と女、いったい何者なんですか。あたしも商売柄、いろんな男女のかかわりを見ていますが、ああいうのは初めてでさ」

「余計なことは言わなくていい」

三沢は、低い声でびしりと制した。

「見たことだけを言え」

男は、へい、と卑屈に頭を下げ、語りだした。

その日、猪俣佐和子に見送られて駅に着いた三沢は、佐和子の姿が消えるなり、公衆電話に飛び込んだ。その一時間後、男が駅に現れた。三沢は、手書きの地図を渡し、この農家の離れに住んでいる男女を見張れ。夕方になったら、藤沢駅前にある喫茶店で待ってるから報告しろ、と命じ、前金十円を渡した。

「ちようど、離れの裏が竹林になってましてね。あたしはそこに潜んで、障子に穴を開けて覗いてたんでさ。しばらくは、男はなにやら書いていて、女はその側で本を読んだり、時々言いつけられて棚から本を運んだり、そんな調子で二時間ばかり過ぎて……さて、そろそろ夕方だし、引

き上げるかって時になって、驚いたのなんの」

「なんだ？」

「あの女、いきなり、男のまたぐら、を蹴りつけたんでさ」

「なに？」

三沢は眉をひそめた。

あのおとなしそうな女が、村野の急所を……？

「ええ、男はこう脚を広げて待ちかまえてるところに、女が足をあげて踵で急所を踵で踏みつけるようにしてね」

「じゃあ、男も承知の上で蹴られたというのか？」

「というか、男のほうが望んで女にそうさせてるようでしたね」

「いったい……なんのために……」

「知ったこっちゃありませんや」

「痛いだろう」

「そりゃそうでしょうよ。実際、その男、痛がるのなんの、両手でこうまたぐらを抑えて、七転八倒でさ……とところが」

「ところが？」

「少し動かなくなっただけだと思っただけ、いきなり自分のな、をつかんで、しごきだしたんです」

「なんだと……」

「ええ、おったった奴をね……」

己の急所を女に蹴らせて自慰に耽る。三沢の想像を超える話だった。「ものの十数秒で果てちゃいましたよ」

「女は、どうしていたんだ？」

「女は、男のまたぐらを踏みつけたら、すぐに出て行っちゃいましたよ。とにかく、あたしも見てられなくて、しかも、あのイカ臭い匂いが漂ってくるし、……たまらなくなつて覗きを打ち切つて、駅に向かいました。そうしたら、いたんでさ、あの女が」

「あの女？」

「男の急所を蹴つた女ですよ」

「どこに？」

「海岸の防砂林の下にしゃがみこんで……」

「しゃがみこんで、何をしていた？」

「泣いてました」

「なんだと……」

「こう、両手で顔を覆つて……ええ、確かに泣いてました」

三沢はしばし口を噤んで考えていたが、やがて紙入れから十円札を二枚取り出すと、男の懐にねじこんだ。

「こりゃどうも……いつもありがとうございます」

頭をぺこぺこ下げる男に、三沢は釘を刺した。

「今日見たことは、全部忘れる」

「へえ、そりゃあもちろんです」

「もし、この噂が聞こえてきたら、お前が漏らしたものと考えて、探偵の看板が出せないよう仕向けてやるからな」

「ご、ご冗談を……こう見えても信用第一ですぞ」

「わかった。さっさと行け」

男が去っていくのを見届けて、三沢はしばし考え込んだ。

やがて立ち上がり、店長に、電話借りるぞ、と声をかけ、備え付けの受話器を取り上げた。横浜市内にある別の興信所の名を告げる。やがて出てきた相手に、三沢は言った。

ああ……また、身の上調査を頼む。今度は女だ。名前は猪俣佐和子。井上という名前を使つてるかもしれない。住んでいるところは、神奈川県高座郡藤沢町……。

数日後の夕刻。

猪俣佐和子は、いつものように村野栄太郎の執筆の手伝いを終えた後、その鞆丸を踏みつけ、家路に着いた。

三沢からは、あれ以来なんの音沙汰もない。

やっぱり、僭越だったのだろうか……。

昨年のメーデーの責任を取らされ無職となった一般党员が、最高幹部に任務の異動を直訴するなど、あつてはならぬことだ。佐和子はあるタブーを破つた。三沢は、イエスともノーオとも言わず、ともかく、がんばりましょう、と当たり障りの無い言葉をかけて去つていった。あからさ

まに拒絶したわけではないが、佐和子にとって希望を抱けるような言葉も、三沢は一切、口になかった。

商店街で酒と惣菜を買い求め、アパートに戻った。あかりをつけると、敷きっぱなしの埃くさい布団が眼に入る。

これから、味気ない惣菜をつまみに酒を呑み、そのまま布団に潜り込む。夜が明ければ、何もしないまま昼間で過ぎ、そしてあの男の家へ……。

胸の奥にどす黒いしみが生まれ、じわじわとからだの中にしみ込んでいくような苦しさに襲われた。

おぼれたものが流木にすがりつくように、佐和子は鏡台の前に座った。音をたてて引き出しを開け、化粧品を引っ張り出す。口紅の箱の蓋を開け、真っ赤な紅を指ですくい、唇に塗る。幾重にも幾重にも……。

一時間後。

鏡台の前に厚化粧のモダンガールが立っていた。かつて、日市のパーラーで、伊集院満枝に言われるまま、満枝と川奈昭三のランデブウを覗き見し、その夜、昭三と見知らぬ男を去勢した時に身に着けていた洋装だった。従妹から借りたものだったが、従妹が何も言わないのいいことに返すのを忘れて、東京まで持ってきたのだ。

羽目を外そう……。

佐和子は、アパートを飛び出した。

向かった先は横浜だった。

盛り場のカフェに入り、ビールを注文する。駅前ですったばかりの煙草に火をつける。初めての煙草に軽くむせた。

店の隅に置かれた蓄音機から、陽気なアメリカのジャズが流れてくる。佐和子は運ばれてきたビールをおおった。店内のあちこちから、女独りのテーブルに投げかけられる物珍しげな眼差しを跳ね返すように、佐和子はひたすらビールを胃に流し込んだ。

やがて、酔いが回ってくるころ、傍らに人影が立った。

「やあ」

見上げると、頭をポマードで固め、鼻下にコールドマンひげをたくわえ、派手な柄のスーツを着ている、絵に描いたようなモダンボーイだった。

「連れはいるのかい？」

「ただけ的口調だったが、どこかいかかわしく濁った響きがあった。

「いいえ」

「同席してもいいかい？」

「どうぞ」

では失敬、と言いなながら、男は佐和子と向かい合って座った。

「あんたみたいな別嬪べっぴんさんが独りきりなんて、今夜は運がいい」

「わたくしが？」

佐和子は、アルコールで火照った顔を両手で押さえた。

「ああ、別嬪さんじゃなきゃ、同席を申し込んだりなんかしないよ」
「お世辞がお上手なのね」

「なあ」

男は、佐和子を覗き込むように言った。

「あなた、言葉遣いが上品だな。どこかのお嬢さんかい？」

「よして」

佐和子は不快げに顔を背けた。

「わたくし、お嬢さんなんかじゃないわ……こう見えても、独り暮らしよ」

「へえ、仕事してるの？」

「ええ」

「どんな？」

「つまらない仕事よ。それに……」

佐和子是不機嫌そうに俯いた。

「初めてお会いしたあなたに、ここまでお話ししなければならぬ理由があつて？」

「ああ、そりゃあ失敬」

男は軽く受け流して笑った。

「じゃあ、なぜ独りでカフェに？」

「当ててごらんさい」

「待ち合わせの相手にすっぱかされた？」

「違います……それに、女が独りでカフェでビールを呑むことが、そんなに不自然なの？」

「そりゃ、まあね……」

「そんなの、古くさい考えだわ。いま、帝国議会では婦人公民法案が審議されているご時世なのよ。男性がなさることを、婦人がしてはいけないというのは、旧弊すぎるわ」

「おやおや」

男は、シネマに出てくる西洋人のように肩をすくめた。

「君はあれかね……やはり、マルクスなんて、読むのかい？」

「当然です……今どき、マルクスも読んでいないなんて、時代遅れだわ」

それから三十分ほど、佐和子は目の前のモダンボーイを相手に、男女平等について演説した。酒杯が重ねられる度に呂律が回らなくなる佐和子を、男は眼を細めて相づちを打っていた。

やがて、佐和子は顔を両手で覆い、テーブルに肘を突いた。

「どうしたの？」

訊ねる男に佐和子は首を振り、よろよろと立ち上がった。そのまま、千鳥足でドアに向かい、外へ出ていった。男は、薄く笑いながら勘定を済ませ、佐和子の外套やバッグを受け取って後を追った。

外へ出ると、近くの路地裏で、佐和子はしゃがみこんでいた。右手で口を押さえている。近く吐瀉物が飛び散っていた。

「大丈夫？」

傍らにしゃがみこんで問う男に、佐和子は涙に濡れた眼差しを向け、小さく頷いた。

「呑み過ぎだよ。少し休んでいくか？」

「いえ……大丈夫よ」

佐和子は立ち上がりとしてよろけ、男にすがりついた。

「ほうら、全然大丈夫じゃないよ。無理しないで、休んでいこうぜ」

「休むって……どこで……？」

苦しげな面持ちで、左右に揺れるからだをなんとか支えながら、佐和子はかすれた声を搾りだした。

「いい家を知ってるんだ」

「いやよ……」

「大丈夫。すぐ近くだし、酔いが醒めるまで休むだけだよ」

「いや……」

「まあまあ、僕に任せなさい。悪いようにはしないよ」

「いや！」

両手で肩を掴んできた男を、佐和子は突き飛ばそうとしてよろけ、相手の胸に顔をうずめるかっこうになった。

「ほらほら、おとなしくして」

背中に腕を回してきた。佐和子は反射的に右の膝を跳ね上げた。

膝小僧が、男の股間に命中した。

「ぐ……っ」

男は眼を見開いて呻いた。

「いやなの！」

佐和子はもう一度、膝で蹴り上げた。さらにもう一度。もう一度……。

再び嘔吐がこみあげてきた。佐和子は無抵抗になった男を突き飛ばし、うずくまって吐いた。

しばらく、そのまま動かずにいた。

やがて人心地がつき、顔をあげた佐和子の視線の先に、男が転がっていた。

仰向けに倒れ、白眼を剥き、全身を痙攣させている。

白いズボンの股間が赤く染まっていた。

「あ……!!」

佐和子は、両手で口を覆い、叫び声が漏れるのを抑えた。

男の睾丸を蹴り潰してしまったのだ。

佐和子は青ざめて立ち上がり、夢中で走った。夢中で走って大通りへ出た。タクシーを呼び止めて乗り込み、鶴沼まで！と叫んだ。鶴沼ですか？ そう、鶴沼よ、早く！

路地裏では、黒っぽい服を着た男が物陰から出てきて、倒れた男を見下ろした。そっと股間に触れ、首を振って立ち上がり、ゆっくりと歩み去った。

その三日後。

東京都内某所の小さなしもた屋の一室で、三沢は興信所から届いた報告書を読んでいた。そこには、三日前の夜の佐和子の行動が逐一書かれていた。横浜のカフェで独りビールを呑み、

誘ってきた男を路地裏で去勢した顛末が……。

「面白い女だ……」

三沢は報告書を畳むと、火鉢に放り込んだ。三枚の便せんに綴られた報告書は、黒い煙をあげて燃え尽きた。

「……使えるぞ」

薄い笑いを浮かべ、紙が灰となってゆく様を見つめながら、三沢は低く呟いていた。

さらに三日後。

鶴沼のアパートを出て村野栄太郎の住む農家に向かっていた佐和子は、途中の海岸沿いの小道で、顔見知りの連絡員と出会った。週に一度、村野の家を訪れていると報告する党員である。

「あ、井上さん」

いつも疲れたような生気のない面立ちの連絡員は、珍しく佐和子呼び止めた。必要な時以外、街ですれ違って他人のふうを装うのが、党員の心得なのだが。

「今日は、井上さんに用があつて来たんです」

「わたくしに？」

「ええ。中央からの指令です。すぐに荷物をまとめて、今から言う住所に引越してください」

連絡員は、向島区向島町……と引越し先の地名を告げた。隅田川を挟んで浅草の対岸にある古い町である。

「村野先生のお宅に行く必要はありません」

口のなかで地名を繰り返して呟く佐和子に、連絡員は続けた。

「あなたが、配置換えになることは、すでに村野さんに伝えてあります」

配置換え……。

佐和子は、連絡員を見つめた。連絡員は眼で一礼し、足早に去っていった。

そうか……。

佐和子の口元が綻んだ。

三沢さんが……願いをかなえてくださったのだから。

海岸に打ち寄せる波音を聞きながら、佐和子は足取り軽く、今来た方向へと引き返していった。